から80年代の言語学と性格論の研究で明らかになった普通言語の差異性の特徴がそのままインターネット言語にも現れており、ことが発現している。「男はおしゃべりな性と女の性が発現する文化にもあるが、70年代はじめアメリカのフェミニスト研究者たちは、実際の会話・録音分析の結果、これが事実に反することを確かめている。特に公の場では、ほとんど男がしゃべっている。家庭での会話では、女子がしゃべる。妻が聞くという結果がとられた。」

一方、ミシェル・エミリアンの研究では、電子掲示板のメッセージについても同じことが言える。女性の参加は男性の参加の30％から40％であり、しかも、理論的な議論となると、女性の参加は16％に落ち込んだ。性別が話題になった時ではさらに、男性の方が女性よりもはるかに多弁である。

インターネット通信では、男の方が女性よりもはるかに多弁である。性差は、インターネット上のメッセージのディスコース分析を行い、そのギャップについての理解をさらに深めるためにメッセージのディスコース分析を行う。
はいった何を教えればいいのだろうかという「アド
テルミズム」が存在する。アドテルミズムは、他人の
言語を理解するための手段として用いられるが、それ
は、他人の言語がどのようなものであるかを理解
するための手段として用いられる。アドテルミズム
は、他人の言語を理解するための手段として用いられ
る。

この女性メンバーが、「退職してはいけない」とい
うのも、「よく退職を決意した」というもので、
また、「私は今ディレクターに隠れている」とい
う書き出しのアドテルミズムを求めるメッセージが
あった。フェミニズム理論のクラスでグループ全
員が同じ評価を与えられているだろうかというものであ
る。これに対しても、多くのアドテルミズムは会話が
寄せる。アドテルミズムを求めるという形をとるな
がら、パーソナルな実際の問題を話し合っているとこ
とは、80年代後女性同士の会話が相互支えである
というわれたことが共通していて興味深い。男の教師か
らはディレクターに隠れた、「助けてください」とい
うような弱気なメッセージが送られてくることはまず
ないだろう。

「女ことばのスタイルと男ことばのスタイル」70年代
から80年代の言語と性差の研究において、「女ことば」と
「男ことば」として同定されるような表現上の違いが
「男ことば」として同定されるような表現上の違いが

言語は普通言語をあたえる通りのものである。ヘリングは
「LINGUISTIC」リストに掲示された「LINGUIST」に分類されるメ
ッセージの一つをこれらの項目が実際に使われた
か、使われなかったかによって分析した結果、数
量的にもこの性差パターンが支持される結果がだとい
う。「女ことば・男ことば・との対比関係は、議論への参
加のありようにも発見されている。議論は少数の参加者
によって、支配されるが、彼らは、男ことば形
式を濫用することによって自らに注意が向くように

- 21 -
Networking Surrounding the Fourth World
Implications of Informational International
men's voices: technology as language. In
Benson, Margaret Lowe. 1998. Women's Voice


Herring, Susan C. 1996. Gender and Democracy.